Ronald Paulson: *Sin and Evil: Moral Values in Literature*

New Haven & London: Yale University Press, 2007. xvi + 403pp.

平出昌嗣

この書は英米文学に現れた sin と evil（悪と訳すが，害悪・不幸の意を含む）を扱ったもので，古代から現代までの諸作品の中にその歴史を追っている。悪の問題を扱ったものには，Colin McGinn の *Ethics, Evil, and Fiction*（1977），Joseph F. Kelly の *The Problem of Evil in the Western Tradition*（2002），Susan Neiman の *Evil in Modern Thought*（2004）といった研究書があるが，本書はきわめて多くの文学作品を扱っていることに特色がある。この罪と悪はキリスト教に由来する，きわめて西欧的な概念であり，西欧文学の重要なテーマになるものだが，キリスト教を精神的基盤としない日本人にとってはよく分からないものである。だから西欧の価値観を知ろうとする者にとっては有益な洞察を多く含んでいる。

この罪と悪は同じ範疇の概念のように感じられるが，Paulson は，「罪と悪，つまり宗教的および倫理的な逸脱の混同が，本書の主題である」(xi) と言って，その二つを明確に区別しようとする。即ち，悪とは，死，病気，苦痛といった，外部から人間に加えられる現実の災いであり，罪は，神学的に，その悪の原因として考えられたものだという (8)。だから罪とは，「作り事，悪を説明する神話」(9)，あるいは「文化的構築物」(11) となる。罪の本質は，キリスト教では，神に対する不服従にある。アダムとイブは神に対して不服従の罪を犯したために，その報いとして，神から悪（病気，死，苦痛）を加えられた。性愛も，たとえ異教では歓喜や豊穣と係わるものだとしても，キリスト教では神から心をそらし，神以外のものに興味を持つことになるため，罪となる（ちなみにア

ウグスティヌスによると，アダムの原罪は性欲にあるという［13］)。従って，罪が人と神に係わる「内面的」なものならば，悪は人と人，あるいは人と神に係わる「外面的」なものになる（xi，8，25)。方向性としては，悪は「下方に向けられる」ものであり，神や権力者から，小さく無力な対象に加えられる危害や苦しみになるのに対して，罪は上方，つまり神あるいは君主に向けられる不服従や反逆となる（20)。だから *Paradise Lost* のサタンは，上に目を向け，神に反逆したことで罪を犯し，下に目を向け，神の被造物であるアダムとイブを堕落させることで悪を行なうことになる（77)。

この定義に基づいて，ポールソンは古代から現代までの代表的な文学作品の中にその現れ方を追っていく。その扱う範囲は実に広く，多くの文学作品が論じられ，圧倒されるが，それはいかにこのテーマが西欧文学の根幹にあるかを示してくれる。ただし悪は，聖書のように，神が人に加えるものではなく，もっぱら人が人に加えるものとして論じられる。これは，本書で扱うものが主として小説であり，小説とは，神話とは違って，近代社会における人間と人間関係を扱うジャンルだからであろう。だから罪とは，権力を持つ者が，社会的に好ましくない下位の者や行為に対して押し付けるレッテルとなり，権力者がそれに対して加える悪（危害）を正当化するものとなる。

本書の構成を見ると，年代順に 8 章に分かれる。第 1 章は聖書に基づく罪と悪の定義と分類，第 2 章ではギリシャ・ローマの古典とキリスト教の風刺文学が扱われ，Virgil，Ovid，Horace，Juvenal，Dante，Erasmus，Swift，Defoe がその対象になる。第 3 章ではルネサンスから啓蒙運動の時代が対象で，Marlowe，Shakespeare，Wycherley，Milton，Gay，Hogarth，Rowlandson，Blake，Burke，第 4 章は小説で，Fielding，Dickens，Hawthorne，Melville の代表作品，第 5 章では Machen，Stoker，James，第 6 章では Stevenson，Wilde，Conan Doyle，Conrad，Eliot，Yeats，Faulkner，Greene，第 7 章では，Coleridge，Wordsworth，Warren，Poe，Hardy，Mary Shelley，Wells，Twain，Byron，Melville，West，McEwan，第 8 章では，Koestler，Golding，Heller，Greene，Le Carré，Conrad，Vonnegut，O'Brien といった作家の作品が論じられている。Dostoevsky，Rousseau などにも言及はあるが，もっぱらプロテスタント的な罪の伝統を引く英米文学がその

主たる対象になっている。結論部では，さらに，ホロコースト，ヒロシマ，ミライ（My Lai），9. 11 など，現代の歴史に現れた悪も論じられている。

このように多くの作家，多くの作品が論じられているが，その基本的な考え方は，筆者の専門であるホガースの分析から来ているように思われる。序文で筆者は，この本が，前作の *Hogarth's Harlot: Sacred Parody in Enlightenment England*（2003）の最終ページから始まったと述べる。彼がそこで得た結論とは，「風刺作家ウィリアム・ホガースとウィリアム・ブレイクをむすび，チャールズ・ディケンズとナサニエル・ホーソンを指す線は，罪と悪の区別——即ち悪と，それとは全く異なった概念である罪を，絶対に混同すまいとする彼ら芸術家たちの態度に基づいている」というものであった（xv）。つまりそれまでの，罪に対して神の罰（悪）が下るという捕らえ方は，ホガース，あるいは 18 世紀の啓蒙運動から変わり，罪と悪の明確な区別に基づく新しい伝統が始まる。そのホガースの考え方は，彼の物語版画“A Harlot's Progress”についての次のポールソンの記述に要約される。「売春婦であることは，法的に犯罪であるとともに，宗教的な罪でもあったが，この主人公の罪＝犯罪には犠牲者がいない。彼女は誰も傷つけてはいない……その一方で，社会の役人たちは，教会と法と政治の名において，悪（投獄，鞭打ち，病気，死）をもって彼女を罰する……ホガースは罪＝法と悪の概念を併置し，罪とは，支配階級が，快楽および認可されない愛に付与した名前にすぎないことを明らかにする」（85）。この売春婦の姿に，イエスの受難が焼き重ねられる。つまり，最初は無垢だった田舎娘を堕落させ，刑罰や死を与える社会のお偉方が，イエスを死刑にした権力者と結び付けられる。悪は社会の側にあり，売春婦は押し付けられた罪を我が身に引き受け，社会の悪を償うことになる。こうしてホガースは，刑罰を加える法の悪よりも罪の方を評価することで，「罪を自分の美学の基礎にする」（98）。

4 章のテーマは，この悪としての法である。まずホガースの版画“Gin Lane”が言及され，堕落し腐敗したジン横丁を，距離を置いて遠くから冷たく見渡す教会の尖塔が，悪を行なうものとしての支配者の象徴になるとする。そしてその構図を映す形で，ディケンズの小説では，役人や大法官庁など，法と正義を体現するものが，弱く従属的なものに力を振るう悪となる。*Oliver Twist* では，

オリバーの周りに置かれる人たちは，法に従う立派な役人たちであり，また子供たちを牛耳る「立派な」悪人たちであって，それは，エッケ・ホモ（Ecce Homo）の絵でキリストを囲む残酷な人たちに相当する。そして弱者である孤児のオリバーと，彼を救うために殺される売春婦のナンシーが，汚れなき罪人となる。一方，ホーソンの *The Scarlet Letter* では，「罪 /Hester は，悪 /Dimmesdale，共同体，そしてピューリタンの宗教およびイデオロギーと対比される」（150）とする。

法や社会が悪として個人と向かい合うのに対し，5 章では個人の内にある罪と悪が論じられる。中心にあるのはバンパイアのイメージで，この人の生き血を吸うことで永遠に生き続ける人間＝怪物は，キリストの死と復活，聖餐式でのキリストの血による永遠の命の獲得という聖なるものを歪める点で罪を犯し，また人間を支配し，人間に死をもたらす点で悪であるとする。そしてこの「バンパイア的所有欲」（181）のイメージをジェイムズの一連の小説にあてはめる。例えば *The Turn of the Screw* では，家庭教師のうちに罪と悪を区別し，彼女が悪と考えているものは，実際は罪，つまり「性と階級の混同」（178）であり，本当の悪は，「子供たちを所有することへの好奇心とその必要性」（177）にあるとする。そして，「一般的に，ジェイムズのお金に飢えたキャラクターたちの中にバンパイアに相当する者を見出せる」（181）として，*The Portrait of a Lady* の Osmond を挙げている。

一方，6 章での主なテーマは分身であり，悪魔的な悪と平凡な悪として，Mr. Hyde と Dr. Jekyll，絵と現実の二人の Dorian Gray，Sherlock Holmes と Professor Moriarty，Kurtz と Congo Company（*Heart of Darkness*），Popeye と Gowan（*Sanctuary*），Pinkie と Ida（*Brighton Rock*）などが論じられる。例えばクルツについて，罪は自らが神になろうとした「原住民との儀式（キリスト教の罪であり忌むべき行為）」（215）にあり，悪は土人たちを所有しようとしたことにあるとする。そしてその悪は，クルツ以上に，アフリカ人を所有・搾取しようとする会社に具体化されているとする。7 章では 19 世紀文学の中に原罪と原悪の関係が追究され，例えばアホウドリを殺す老水夫の理由なき行為（*The Rime of the Ancient Mariner*），ネコを殺すポーの主人公のひねくれた精神（“The Black Cat”）

は，その不可解さにおいて，リンゴを食べたアダムとイブの原罪に由来するものとする。

最終章では，20 世紀の二つの悪は戦争と民族大虐殺であるとし，さらにそれを取り巻く悪としてイデオロギーを挙げて，*Darkness at Noon* や *The Lord of the Flies*, *Catch-22* などの小説が分析される。ホロコーストを扱った箇所では，ヴォネガットの *Slaughterhouse-Five* を，「もう一つのホロコースト，ただし，ナチによるものではなく，連合国の爆撃機集団によるもの」(331) と述べる。筆者のこうした見方は文学を越えて現実の歴史にもおよび，アメリカ軍によるヒロシマへの原爆投下にも適用される。そして本書の終わりは，こう締めくくられる。「ホロコーストの意味するものは，罪ではなく，悪だけである。狂信者を除けば，ホロコーストは罪の仮説を無効にする。「罪」は，ホロコーストやヒロシマに対する責任に適用される，弱くて逃げ口上的な言葉である……罪は，イデオロギーの信奉者が敵対者の行動を見るときの，一つの想像上のレンズであった。20 世紀の途方もない悪の数々と並べてみると，罪はささいなものに見える——それは，おびただしい死と苦しみという過酷な現実から目をそらすものである……我々はこう結論付けなければならない。即ち，行為としての悪は，数学で言う定数であり，罪は変数であると」(346)。

以上のように，ポールソンにとって，悪が現実であり，罪は，相手に危害を加える場合に，その行為を正当化する概念という意味を持つ。この理解の仕方は図式的で分かりやすいが，ただすべての文学作品にわたり，それほど明確に罪と悪を区別できるものだろうかという疑問も残る。しかしながら，古代から現代まで，非常に多くの作家を対象として，文学に現れた罪と悪の流れを俯瞰的に示してくれたことはやはり偉業であり，有益である。